書塾の仲間たち

第 276 回

書写書道教室み空色（三重県桑名市・朝日町）

●書塾からひとこと●

書写書道教室み空色は、三重県の最北端に位置する桑名市と朝日町の二カ所で教室を開いています。教室を始めて十二年目に入りました。おかげさまで幼児から大人の方まで、幅広い世代の方々と同じ時間を共有し「ていねいに書く」を心がけ、楽しく教室を続けることができています。

教室では、初めに大人も子どももひらがな五十音の基本を半年ほどかけて学習し、ひらがな終了後に毎月の課題に取り組んでもらうようにしています。大人の方の中には、毎月の課題提出は気が重いという方もあり、課題を書くのではなく、ゆっくりご自分のペースで学んでもらえるように、月刊「書写書道」のお手本を元に自身が手作りした教材で日々学習をしてもらっています。

また、毎月の課題に加え、夏休みや冬休みには学校の課題に取り組み、書写技能検定に挑む人もいます。

文字を美しく書くだけではなく、コミュニケーションの一つとして、日々の出来事や今話題になっていることなどを折りまぜ、楽しくお話ししながら、ひとり一人に寄り添う指導を心がけています。私自身、まだ文字の基本を中心とした指導しかできないため、日本武道館での講習会や研修会にもできる限り参加し、学んだことを一つでも多く教室でお伝えできるよう、自己研鑽（けんさん）に日々取り組んでおります。

昨今、文字を書く機会が減ってきている中で、文字を書くことの楽しさや大切さを、日本文化の一つとして多くの方にお伝えしていけるよう、これからも日々、より良い教室運営ができるように取り組もうと思います。

書写書道教室み空色　草場　都

※書塾に連絡したい方は事務局へお問い合わせください。

課題を見つけ、自分で考える姿勢が身につきました

岐阜県各務原市立中央中学校一年　喜多（きた）　音羽（おとは）

私が習字を始めたのは、小学校三年生の時でした。きっかけは、仲の良い友達に「一緒に習いに行かない？」と誘われたことです。その時の私は自分の書く字に自信がなく、もっと綺麗（きれい）で整った字を書きたいという思いから、習字を始めました。

通い始めて良かったことは、字が綺麗になり、自分に自信が持てるようになったことです。以前は学校のノートやテストの解答も、ただ書けば良いと思って急いで書いていました。しかし、習字で一画一画の「止め」や「はらい」を丁寧に書く習慣がつくと、学校での筆記も自然と丁寧になりました。担任の先生から「字が読みやすくなったね」とほめられた時は、とてもうれしくて、習字を続けて本当に良かったと思いました。この自信は、他の勉強や生活にも前向きに取り組むきっかけをくれました。

一番成長したと感じるのは、失敗を分析して次に活（い）かす力です。習字には消しゴムがないので、一度書いた線は消せません。以前の私は、一カ所でも失敗するとすぐあきらめていました。しかし、練習を重ねるうちに、自分の作品をじっくり観察し、なぜ太くなったのか、次は筆をどう動かせば良いかを考え、課題を見つける姿勢が身につきました。この振り返りの習慣は、勉強で間違えた問題を解き直す時や、生活の中での反省にも活かされるようになり、成長できたように感じています。

私は四月から中学生になりました。これから勉強も難しくなり、部活動に入り忙しくなっても、身につけた集中力を大切にして、どんなことでも乗り越えたいです。今年の目標は、さらに昇級することです。そのために、これからも日々の練習を大切にしながら努力を続けようと思います。

私と書写書道　第276回

筆を走らせながら内面を磨く

千葉県松戸市　星野（ほしの）　佑一郎（ゆういちろう）

四年前、息子が小学二年生のときに、私は息子とともに書道を始めました。私自身、字がうまくなかったので、息子には綺麗（きれい）な字を書けるようになってほしいと願っていました。また、海外への輸出が多い商品を製造していたので、日本語の文字の美しさが商品の造形のアイデアにならないかと考えたことも、書道を習い始めた理由の一つです。

私よりお年を召した方に「子どもと一緒に書道を習っている」と言うと、今しかできない貴重な経験だとか、子どもにとってもいい思い出になるだろうとおっしゃっていただき、次第に「今、貴重な経験をしているのだな」と自分でも思うようになりました。去年の四月からは、小学一年生の娘も一緒に習い始めました。

しかし残念なことに、息子は最近、毎回「行きたくない」「やめたい」と連呼しています。小学六年生、思春期にさしかかり、それでなくとも日々のことが不愉快に感じる年頃です。親とはいえ、他人に無理強いされた習い事ですから、いよいよ本気で気に入らないと思うのも仕方のないことでしょう。

殊に去年の夏ごろの書道大会は、彼には残念な結果に終わりました。子どもたちふたりとも出品したのですが、娘が特賞、息子は銀賞でした。始めて数カ月の妹に抜かされたとあってはやめたくなる気持ちも分かります。息子がいつまで書道を続けるかは分かりませんが、彼には長らく楽しい時間を過ごさせてもらい感謝しています。

私は筆を走らせるとき、いつも自身の内面が磨かれているような不思議な気持ちになります。いつか息子も、この文字の美しさが、自分たち日本人の心を形作る大きな一つの要素なのだということに、気づいてくれればいいと願って止みません。